

「ラコタ」

作
ひろいだいち



登場人物

- タタンカ・ヨタンガ
- ジトカラ・ダジ
- ティヨールレ
- ニニ
- エドナ
- デンゼル

第一幕

ゆったりとした部族の曲が流れている。

役者がみな、舞台上にいる。それぞれ思い思いの場所で、箱を眺めている。

女たちが立ち上がり、地面に様々な動物やシンボルを描いていく。

二二

偉大な旅人と

その従者が降り立った時

地上はまだ何もなく

ただ土塊だけがあった

エドナ

偉大な旅人と

その従者は

土塊を積んで

空を造り、山を造り

土塊を削って

海を造り、河を造った

ジトカラ

偉大な旅人と

その従者は

残りの土塊から

二本足の者

四本足の者

空を飛ぶ者

足のない者

すべての生き物を造った

描き終わると、彼女らは再び座り込み、目の前に箱を置く。
その周りから、男たちの声が響く。

男 1

おい、見つけたか。

男 2

いや、まだだ。

男 3

あれだ！

男 1 酋長か？
男 3 あの羽飾り見ろよ。
男 4 でけえ足だな。
男 1 売れば高いんじゃないか。
男 4 足だぜ。
男 1 だから珍しいんだろ。
男 4 東部の連中はよ。
男 3 おい。
男 2 どうした。
男 3 こいつまだ生きてる。
男 4 男か。
男 3 男の下。
男 4 下？
男 3 抱きしめられてるみたいな。
男 1 女だ！ 小さい。
男 2 何かあるか。
男 1 首飾りしてる。鳥の首飾りだ。

その瞬間、女たちは空を見上げる。

鳥の鳴き声そして、遅れてバッファローの地響きが遠くから聞こえてくる。

女たちは一斉に隠れようとするが、辺りには何も無い。

彼女らは必死で身を寄せ合う。ただ音のする方向を必死に見つめながら。

暗転。

一幕了

第二幕

1890年・

仮面を付けた呪術師が、祈祷を唱えながら、子どもに白酒を飲ませる。
段々と荒かった息が落ち着いていく。

テイヨールレ

どうだ？

ジトカラ

肺炎を起こしかけてる。なんだってこんな酷くなるまで放つといたんだ。

テイヨールレ

ちゃんと暖めた！ 中々熱が下がらないのは、変だと思っただけども、それだつてこいつも特に苦しいとこはないって、

ジトカラ

それで、子どもの言うことそのまんま飲み込んだか。(仮面を壁にかけながら) あんたは父親失格だよ。こんだけ熱出て、苦しくないわけないだろ。なのに一人狩りに出て、病気なのに馬の世話押し付けて。

テイヨールレ

言ってくれてりや家にいた！

ジトカラ

二ニの気持ち、考えてやったことあんのかい。

テイヨールレ

……。

ジトカラ

明日には熱は下がるだろうけど、二・三日は目離すんじゃないよ。

ジトカラは水を汲みに行く。

一人取り残されたテイヨールレは、二ニの方へ近寄ろうとするが、苦しげな様子に、どうすればいいか分からない。

エドナが入ってくる。

エドナ

いい？

テイヨールレ

ああ。

エドナ

良くなった？

テイヨールレ

薬が効いたみたい。

エドナ

ジトカラは？

テイヨールレ

水汲みに行った。

エドナ

じゃ、すぐ戻ってくるね。

テイヨールレ

なんかあったのか？

エドナ

……うん。

テイヨールレ

何だよ。

エドナ

うーん……。

テイヨールレ

ムタが馬から落ちたか！

エドナ

え？ ううん。家でご飯食べてるよ。

ティヨールレ

そっか。

エドナ

うん。

間。

ティヨールレ、チラチラとエドナとニニを伺う。エドナは全く気づかない様子で、焚火を見つめている。

ティヨールレ

なあ……。

エドナ

ん？

ティヨールレ

……あの！

エドナ

うん。

ジトカラ

(入って) どうした、エドナ？

ティヨールレ

あ……。何でもない。

エドナ

うん……。

ティヨールレ

どうぞ。

エドナ

……ジトカラ。

ジトカラ

何だい？

エドナ

あのね……ラコタが襲撃された。

ジトカラ

オグララかい？

エドナ

ハंक。パパ。

ジトカラ

ハंक。パパ？ あそこが何したってんだい。

エドナ

でね……タタンカ・ヨタンガが殺されたって噂もある。

ティヨールレ

えっ！(ニニを気にして口を塞ぐ)

ジトカラ

あいつはリザベーションにいたはずだろう。

エドナ

うん。だからリザベーションごと。

ティヨールレ

実際襲われたのはタタンカ・ヨタンガの家だけっぽいけど。

エドナ

でも、どうして？

エドナ

分かんないよ。

ジトカラ

……今日は帰りなさい。

ティヨールレ

でも。

ジトカラ

ニニは私が見とく。

ティヨールレ

う、うん。

エドナ

ねえ、私たちは大丈夫だよ？ 平原じゃなくてリザベーションにいて、白人

ティヨールレ

たちの言うこと聞いて、仕事して。

ティヨールレ

これでいいんだよね？

ジトカラ

ああ。酋長を呼んで来てくれないか。

エドナ

……うん(出ていく)。

テイヨール

えっ、あ(エドナはもう外に出ていってしまった)。

じゃあ……俺も。あの、よろしく(出ていく)。

ジトカラ、先程のエドナのように焚火を眺める。

火が段々と弱くなっていく。

二幕
了

第三幕

ニニが水の入った桶を持ち上げようとする。
その瞬間、身なりの良い少年が走り込んでくる。

デンゼル ニニ！ 具合は？ もう大丈夫？

ニニ どうしたの？ そんなに走って。

デンゼル 具合は？

ニニ 大丈夫。ジトカラが看病してくれたの。

デンゼル あのジャラジャラすごい人だよ。

デンゼル 呪術師だって父さんが言ってた。

ニニ 私たちに言葉を授けて下さったり、誰かに不幸があると、その人のために祈って下さったり。

デンゼル ……牧師様みたいに？

ニニ ……じゃあさ。

デンゼル なあに？

デンゼル 呪術師様も意地悪言う？

ニニ 意地悪？

デンゼル (鞆から聖書を取り出す) これを毎週読んで、それで、お話して下さるんだけど。いつも言うんだ。ここはリザベーションに近いから、気をつけるようにって。決してインディアンと関わってはいけませんよって。

ニニ それは意地悪で言ってるんじゃないわ。
でも、

デンゼル あなたの家には、黒人の召使がいるでしょう？

ニニ うん。コニーだ。

デンゼル でも、あなたはそのコニーとは一緒にご飯を食べない。

ニニ それは、そうだよ。

デンゼル どうして？ 何故あなたは当たり前のようにそう言えるの？

デンゼル それは父さんが。

ニニ あなたのお父さんは偉い学者さんかもしれないけど、私たちの立場を変えようと積極的に活動もなさってるけど、でも、あなたたちの世界では、そうなの。その牧師様が言ってることのほうが正しいの。あなたのお父さんも、本当は私たちを信じてるの。

だからきくと、私たちはここから出られることなんてない。

デンゼル

えっ。

ニニ

リザベーションに、あなた達は簡単に入って出ていけるけど、私たちはここから出られることはない。どこへ行くにも、あなた達の監視が必要になる。ここはそういう所なの。

ニニは桶を持って去ろうとする。

デンゼル

あの、僕、そういうこと言うつもりじゃなかったんだ。
ただ、君が心配で、元気づけたくて。
そう、そこに！

ニニ

(デンゼルが近寄ったことで桶をこぼしかける) きゃっ！

デンゼル

ごめん。でも、今、そこに旅芸人のインディアンが来てるんだ！ 君らと似てるけど、もつと派手な人たち。ここでショーをしていくんだって。

ニニ

デンゼル。そういうのは、あなた達白人のためのものだから。どうせリザベーションの外でしょう？

デンゼル

いや、すぐそこで！

ニニ

えっ。

デンゼル

ほら！ 聞こえるでしょ、あの音！

二人は耳を澄ます。

激しいドラムの音と共に巨躯のインディアンが入ってくる。

第四幕

タタンカ・ヨタンガ　ハオ。私はハンクパパ族の酋長タタンカ・ヨタンガと言います。白人のあなた方からすれば、随分と変わった名前でしょう。この名前を英語に直すと、シツティング・ブル。座る雄牛、という意味になります。どうぞ、シツティング・ブルという名で、気安く呼んでやって下さい。

ワイルド・ウエスト・ショー。

タタンカ・ヨタンガを中心に三〜四人(?)でのパフォーマンス。

観客参加だと尚良し。
5分程度。

演目の最後に、タタンカ・ヨタンガによる、サン・ダンスの祈りの言葉が唄われる。

タタンカ・ヨタンガ　我らが父なる霊よ。

我らを真の道へと導きたまえ。

わたしと、わたしの家族と、わたしの部族を、あなたの摂理の道へと導き、心と身体を健全なる状態に保ちたまえ。

子なる我らを教え導きたまえ。

地球上の全てに平和を導きたまえ。

太陽と、その恵みに感謝しよう。

今年も動物たちには豊かなる草を、

我ら人間には豊かなる実りをもたらしたまえ。

再び焚き火が燃え上がる。

タタンカ・ヨタンガは座り込む。

向かいにはジトカラ。

ジトカラ　　こういう歌がある。

『私は己を狼だと思っていた。

しかし、夜になると私は

梟の鳴き声が恐ろしくてたまらなくなるのだ』

しかも、あんたは狼でも熊でもない。のろまな牛でしかない。

タタンカ・ヨタンガ 足の速さは関係ないよ。どうせ俺たちは囲まれて、どんなに勢い走ったって、とんがった柵にぶつかるとはなだ。

ジトカラ その柵の中でしか生きていけないんなら、そうするしかない。

タタンカ・ヨタンガ お前ももっと自由だろう。ジトカラ。お前の名前の意味は？

ジトカラ ジトカラ・ダジ。イエロー・バード。

タタンカ・ヨタンガ 鳥も空を飛べないくらいかい。

ジトカラ あの柵は、こうずーっと続いて、空まで伸びてるんだ。それは鳥の翼でも届かないくらい高くまで。

ニニとデンゼル、エドナが入ってくる。

エドナ あっ、ごめん。

ジトカラ 子どもたちを連れて出て行きな。

タタンカ・ヨタンガ 構わないよ。

ヨタンガは、ゆっくりと立ち上がる。

タタンカ・ヨタンガ ハオ。

デンゼル ……ハオ。

タタンカ・ヨタンガ 白人の子だ。よくここまで来られたね。

ニニ 友達だから。

タタンカ・ヨタンガ 君たちの？

エドナ この子のお父さんは、私たちの生活を調べているんです。

タタンカ・ヨタンガ じゃあ、お父さんに伝えなさい。私たちはあるがままを愛する。馬や、石ころや、風や。ただそこにあるもの達を信じる。そして私たちも、そこにあるもの達と同じ、この自然の一部なのだ。私たちは、いつでも、自由だ。

デンゼル ……うん。

エドナ さ、デンゼル、行くよ。デンゼル？

デンゼル あの、あなたは どうしてリザーベーションの外を自由に歩きまわれるんですか？

エドナ すいません。

タタンカ・ヨタンガ そう見えるかもしれないが、実際には私もここにいる人たちとは大して変わらない。

このショーは、白人が興行主だ。彼の庇護下でのみ私は発言にいくばくかの自由を与えられ、ワシントンを訪れることが出来る。

デンゼル ワシントンまで行ったんですか？

タタンカ・ヨタンガ もちろん巡業でだが。

デンゼル 僕はいつか、このアメリカを、全ての人が気軽にワシントンまで行けて、生活ができるような。そんな国にします。

タタンカ・ヨタンガ もちろん私だって、その日を待ち望んでいる。

デンゼル 僕が、やります。

タタンカ・ヨタンガ そうだね。

明日また会おう。

ジトカラ ああ。

タタンカ・ヨタンガは荷物を抱え出ていく。

ジトカラ どうしたんだい？

エドナ ニニとデンゼルが二人だけで歩いてたのを見かけて。

ジトカラ テイヨールは？

エドナ さあ。

ジトカラ ニニ。

あたしが大丈夫って言ったの。お父さん、みんなに馬鹿にされないよう頑張ってるから。

ジトカラはニニの脇にしゃがみ、脇に手を挟みこむ。

ジトカラ 熱は下がったね。エドナ。

エドナ うん。

ジトカラ デンゼルを外まで送ってってあげて。

デンゼル 大丈夫です。

ジトカラ 子どもでも関係ないって奴らも沢山いるんだ。

エドナ もうすぐ暗くなるから。

デンゼル ……はい。

ニニのことを気にしながらも、エドナに連れられ、デンゼルは出ていく。

ジトカラは壺をあさり始める。

ジトカラ あんたのお父さんより、よっぽど面倒見がいいね。

ニニ 忙しいから。

ジトカラ あいつがいい戦士だったのは知ってるよ。でも家族を守るのだって男の役目だ

ろう。

ニニ うん……。

ジトカラ

誰ももう馬鹿にすることもないって。卑屈になることないって言ってやんなよ。

ニニ

新しいお母さん欲しいかって聞かれた。

ジトカラ

はあ？

ニニ

多分本気だった。

ジトカラ

もっと言い方なかったのかね。

ニニ

お父さんはどうなのって聞いたら黙っちゃった。

ジトカラ

そこで黙るくらいの覚悟じゃ、まだまだ先の話だね。

ニニ

うん。

ジトカラ

ほら。

ジトカラはニニに、丸薬と小さな木箱を渡す。

ジトカラ

あんまり汗かかない季節だから。夜はこれ飲んで暖かくして寝るんだよ。

ニニ

これは？

ジトカラ

あげるよ。

ニニはふたを開けると、中には、鳥を模した首飾りが入っている。

ジトカラ

ペジュテがあんた達のところを出てってから、お前を守ってくれるはずだった魂

たちも消えていってしまった。

ニニ

でも。

ジトカラ

お守りだよ。

ジトカラは背後にまわり、首飾りをニニの首につける。

ニニ

ジトカラの名前と同じ。

ジトカラ

あんたはまだ若くて自由だ。デンゼルも言ってたろう？ ワシントンだってど

こだって行けるんだよ。きつといつか、そういう日が来る。

ニニ

ワシントンに行きたいわけじゃないわ。

ジトカラ

うん。でもこの地面を再び自由に駆け巡れる日を、私たちはずっと夢見てるん

だ。それは、リザーベーションで生まれたあなたみたいな子だつてもちろんそう。

きつと身体の中のどこかでそれを求めている。

ニニ。私はもう囲まれてしまった。鳥の羽はもげて野山に落ちてしまった。起き上がったときにはもう、どっちを向いても見えるのは木の杭と鉄の鎖で、翼をいくら羽ばたかせても、高く高く続く柵を跳び越すことは、出来なくなってしまうって。

この鳥は、あんたがこの先自由に生きていけるよう守ってくれる。あんたは絶

対私よりも強い鳥になれる。私よりもずっとずっと遠くまで飛んでいける。

ニニはペンダントとジトカラを交互に見て、ぎゅっと手の中の鳥を握り締める。

四幕
了

第五幕

ティピーの外、ティヨールレとエドナが相對している。

エドナ ニニは？

ティヨールレ うーん、思うんだけどさ。俺そういうの向いてないんだよ。

エドナ そうなのって？

ティヨールレ 今だってさ。デンゼルが見てくれてるし。あいつしっかりしてるから。だから、俺はこうして自分の仕事が出来るんだよ。

エドナ そうなの。

ティヨールレ インディアン・ショー、見た？

エドナ いいえ。

ティヨールレ そっか。俺も行きたかったんだけどさ。

エドナ 行かなかったの？

ティヨールレ ニニ達は行ったみたいだよ。でさ、今日もやるみたいなんだ、あれ。

エドナ ショーを？

ティヨールレ そうそう！ 白人たちがあまり来なかったからって。昨日ショーの最後に言うてたらしい。

エドナ ニニから聞いたの？

ティヨールレ いや？

エドナ そう。

ティヨールレ でさ、エドナはこれから、

エドナ 昨日ニニと話した？

ティヨールレ うん、そりゃあ。

エドナ 何を。

ティヨールレ デンゼルとインディアン・ショーを見に行ったって。

エドナ それだけ？

ティヨールレ うん。

エドナ 他には。

ティヨールレ 他って？

エドナ ……。

ティヨールレ 昨日何かあったのか？

エドナ 何してるの？

ティヨールレ えっ？

エドナ ティヨールレは何してるの。

ニニのことちっとも見ないで、自分のことしか見てない。デンゼルじゃ駄目なの。私でもジトカラでも駄目なの。あの子はあなたに構ってほしいのに、こんなところで何してるの？

テイヨール
俺だって朝から仕事してたよ。日の昇る前から起きて、馬を磨いてやって、丸々して。食事の支度だって！全部俺がやってるんだ。

エドナ
そんなの当たり前じゃん。ペジュテはもういないんだから。あなたの自分勝手に嫌になって出てったんでしょ。自業自得じゃない。なんでそれでニニが辛い思いするの？ 出てったペジュテもペジュテだけど、なんであなたが一番ヘラヘラしてるの。

テイヨール
してない。

エドナ
してたじゃん。今してたじゃん。どうして自分のことしか考えないのよ。

このリザベーションのことだってそう。何も分かってない。どうして白人が少なかったんだと思う？ ああ、ショーが来て、私たちがどう見られてるのか、分かかってないでしょ。

テイヨール

え？

エドナ
今何が起きてるのか、もっと考えてみなよ。行ってみれば？ ショー。きっと

楽しいよ。そうやってヘラヘラ笑って楽しんできなよ。

エドナはテイヨールに背を向け去っていく。

テイヨールは立ち尽くす。

そこに、桶を抱えたニニが歩いてくる。

ニニ
お父さん、どうしたの？

テイヨール
おう。

ニニ
ご飯まだこれからだけど、今日何時くらいに帰ってくる？

テイヨール
んー。それ、どうした？

ニニ
ああ。ジトカラにもらったの。

テイヨール
いつ？

ニニ
昨日。

テイヨール
そっか。

ニニ
お守りにしろって。

テイヨール
あの子。

ニニ
父さん、今日さもうこの後何にもないんだ。

ニニ
えっ、そうなの？

テイヨール
うん。でさ、インディアン・ショーって、今日もやってるんだろ？

ニニ
うん。

テイヨール
それ、行かないか？

ニニ えっ？ でも昨日も行ったよ。

ティヨーレ デンゼルとだろ。

ニニ うん。

ティヨーレ 今日は父さんと。

ニニ ……。

ティヨーレ たまには。な。

ニニ うん。

ティヨーレ よし、行こ。

二人は歩き出す。

暗転。

暗闇の中、ショーの開始を告げる太鼓の音が響く。

五幕
了

第六幕

インディアン

孤独なワシよ

どこへ行つた

どこへ行つた

お前に繋がるものたちは

泣いてお前を探してる

私もお前を探しに行こう

泣きながら

辛くても

インディアン

父よ

ここへ来てください

二本足のものが大地に横たわる

私は生き返る

父よ

ここへ来てください

母よ

ここへ来てください

二本足のものが大地に横たわる

私は生き返る

母よ

ここへ来てください

インディアン

友よ、あなたは遠くへ行つた

友よ、彼らは泣いている

戦いは北であつた

友よ、あなたは遠くへ行つた

友よ、彼らは泣いている。

全てのインディアン

竜巻だ！ 竜巻だ！

新しい世界が現れる

雪のように早く

新しい世界が現れる

雪のように静かに

暗闇の中、タタンカ・ヨタングの姿が浮かび上がる。

タタンカ・ヨタング

ハオ！ 今日には昨日よりも多くのお客様にお集まりいただけましたことを、嬉しく思います。

私は言葉を伝えるために、このショーに参加しています。インディアンは、あなたたちとは異なる私たちだけの言葉を持っています。私たちがこの大地に生きてきて感じたこと、思ったこと、それをあなたたちに伝えるために、私は英語を覚えました。

この大地には、昔は何もありませんでした。しかし、生きていくための全てがありました。私たちは大地から生まれ、その恵みを受け、共に生きてきたのです。

そこに、あなたたち白人がやってきた。あなたたちは、最初はこの大地に共に生きることを望んだ。私たちの祖先も喜んであなたたちを受け入れた。しかし、あなたたち白人は、本来は誰のものでもない土地を自分たちだけで独占し、家を建て、柵で区切り、この大地を狭くした。そして、私たちを追い立て、私たちインディアンに、自由に生きることを禁じた。しかし、あなたたちに、何故そのようなことを強要されなければならないのだろうか。

あなたたちは嘘つきだ。私たちが土地を盗んだ泥棒だ。私たちは決してインディアンとしての心までも屈服させ、白人たちに従うつもりはない。

沈黙。

万雷の拍手。

第七幕

ジトカラのティピーに火が燃えている。
ティヨーレが座っている。

エドナが入ってくる。

エドナ ジトカラは？

ティヨーレ 酋長のところ。

エドナ そう。

ティヨーレ みんなで、これからのこと話してくるって。

エドナ でも、私たちはきつと、このままよ。

ティヨーレ どうして。

エドナ タタンカ・ヨタンガみたいには、わたしたちはなれないもの。

ティヨーレ そうかな。

エドナ 変わっていくことをあの人は嫌っていたけれど、でも、生きていくためには必

要なことよ。

ティヨーレ 本当にそうなのかな。

エドナ どうして。

ティヨーレ 俺は、白人たちのことなんかよく知らなくて。ここがお前たちの土地だって言

われても、まだよく分からないんだ。誰がいつどこにいたって。土地は気にし
ないだろ。なのに、俺たちはこれからもずっとここにいるのかな。

リザベーションを出るの？

エドナ ニニはまだ、俺たちの本当の生き方を知らないだろ。

エドナ そんなの知らなくたって生きてけるよ。

うん。

エドナ 生きてかなきゃ。

あの日さ。

ティヨーレ ん？

エドナ ジトカラがニニに首飾りを渡してたんだ、鳥の。

うん。

ティヨーレ あいつは鳥になった。きつと、これからあいつの目は俺なんかより、もつと色
んなものを見るようになる。

見せてあげたいの？

エドナ うーん。

エドナ あの子が大きくなってからじゃ駄目なの？ それまであの子を守るのがあなた

の役目じゃないの？

ティヨールレ

うん。

エドナ

ニニの話、聞いてあげてる？

ティヨールレ

多分。前よりは。

エドナ

なら、今度ニニが何を望んでるのか、聞いてあげて。きっと、あの子は答えてくれるから。

ティヨールレ

うん。ありがとう。

エドナ

何が。

ティヨールレ

この間。

エドナ

ああ。

ティヨールレ

まずニニと、ちゃんと暮らしてみる。

エドナ

そうしてみて。

ティヨールレ

風邪、少し良くなってきたみたいだ。

エドナ

でも、まだ安心しちゃだめだよ。

ティヨールレ

してないよ。

エドナ

そう？ 早く帰ってあげないと。

ティヨールレ

ここを留守には出来ないだろ。

エドナ

私が見てるから。ほら。

ティヨールレ

うん。それじゃ。

ティヨールレは出ていく。

エドナは火を見つめ、歌を呟く。

エドナ

世界のすべてが新しくなる

新しい国がやってくる

驚が知らせを運んでくる

地球のすべてが新しくなる

新しい国がやってくる

バッファローが帰ってくる

デンゼルが歩いてくる。

ニニが現れ、二人は見つめあう。

ニニは箱を手に行っている。

ニニはそつと箱の蓋を開ける。

鳥の鳴き声が響く。
火が消える。

終